

一粒米 森恒太郎(盲天外)

松山市



森恒太郎
松山市立子規記念博物館蔵

森恒太郎は、元治元（1864）年に伊予郡西余戸村（現松山市）の庄屋であった森謙蔵^{けんぞう}の長男に生まれた。後年、正岡子規に師事し、天外の号を受けたが、自らは盲天外と称した。恒太郎は、生後3か月で庄屋となった。しかし、彼が幼少の時に父が亡くなり、叔父の森源六^{げんろく}が庄屋の後見を務めた。恒太郎が後に余土村（明治22年の合併により村名を余土村に変更）や愛媛県のために尽力したのは、村のために尽くした叔父の姿を見て育ったからであろう。

明治10（1877）年に、恒太郎は愛媛県北予変則中学校（現松山^{ときよし}高等学校）に入学する。このときの校長が、慶應義塾^{けいおう}で学んだ草間時福^{まさなお}であった。明治13（1880）年、上京し、中村敬宇（正直）が設立した同人社で学び、自由民権思想に基づく新時代の精神と教養を身に付けた。

明治19（1886）年の秋に、帰村すると間もなく、余戸村は台風による洪水のために全村が壊滅的な打撃を受けた。彼は村を立て直すため「余戸農談会」という青年グループを作り、村の復興に取り組んだ。その中で余戸村の議員となって活動するにつれて政治への関心が高まり、明治23（1890）年に県議会議員となった。

明治27（1894）年9月、左目をわずらい東京の病院で治療するが、明治29（1896）年、両眼とも失明した。将来に希望を失い、失意の中で暮らしていたある日の食事中、膝の上にこぼれた一粒の米に触れ、彼の心に強く感じるものがあった。「そうだ、これは、わずか一粒の米にすぎない、一粒の米でさえ、その人の血となり肉となり、いや、精神にまで向上進化していくではないか。たとえ目は見えなくても、世のため人のために働くことはできる」と一粒の米から勇気づけられ、前向きに生きていこうと決意した。

その後、彼のもとに余土村の村長になってほしいとの要請が届いた。このとき彼は、目が見えないという理由で辞退するが、村人の熱意に押され引き受けることとなる。しかし、県は、視覚障がい者が村長になった前例がないことを理由に認めなかった。彼は、ここで引き下がれば、全国の視覚障がい者が公職に就けなくなると考え、その不当性を県知事に訴えてついに村長就任を認めさせた。明治31^{そんせ}（1898）年2月、日本初の視覚障がい者の村長が誕生した。明治33（1900）年には、「余土村是（村のきまり）」を作り村の改善に努めた。明治36（1903）年、第5回内国勸業博覧会に出品した「余土村是調査資料」が一等賞に選ばれると、先進的な村として全国から見学者が押し寄せた。彼は、10年間余土村長を務め、村づくりに尽くした。

さらに彼は、障害のある子どもたちに教育の道を開き、自立させていくことこそ自らの責務であると考え、私財を投げ出し、明治40（1907）年、松山市二番町に愛媛^{もうあ}盲啞学校（現県立松山盲学校・現県立松山聾学校）をつくった。また、昭和9（1934）年に亡くなるまで、善隣運動協調促進会の会長に就いて融和運動に関わったり、天心園という私塾を開いて後進の育成にあたりたりするなど、精力的に活動した。

〔参考資料〕

愛媛県史編さん委員会 『愛媛県史 人物』
森恒太郎 『一粒米』



松山盲学校内にある記念碑